

第8回

シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾

ともひさ
太田朝久

駒場集団の言説の誤り

本講座では、霊的集団「李勝哲・駒場久美子集団」の言説の誤りを取り上げます。彼らは、16万訪韓セミナーのみ言などを自分かっつてに解釈し、自分たちの活動を正当化しようとしています。彼らの「誤った言説」を文鮮明先生のみ言を中心に正しながら、私たちが持つべき正統的な信仰とは何かについて説明します。KMS会員とAPT F会員は動画版シリーズ「霊的集団の誤りを正す」第3弾を、KMSウェブサイトでも視聴できます。第1弾、第2弾も併せてご覧ください。なお、本文中、駒場資料からの引用は茶色で色分けしています。(編集部)

よって墮落しました。
人間世界における「愛の基」は、人間始祖アダムとエバであり、彼らが完成して「真の父母」になっていたなら、彼らが霊界と地上世界を併せた宇宙の「愛の基」になっただけです。しかし、ルーシエルは、自分こそが宇宙の「愛の基」でありたいと願う過大な欲望を抱いてエバを誘惑したのです。
したがって、墮落とは、ルーシエルが「**霊的生をあきらめた**」というものではなく、むしろ自分こそが霊界と地上世界、すなわち宇宙の「愛の基」となりたいというものであり、駒場集団が言う「**霊的生をあきらめて肉的生を選択した**」という次元のものではありません。
墮落の動機は、物欲レベルのものではありません。墮落は、神様から愛されなかつたと感じる「愛の恨み」から来る、神様に對する反逆行爲です。
また、エバの墮落の動機も、肉欲や物欲に負けたというレベルのものではありません。天使長ルーシエルと一つになれば幸せになれると思ひ、偽りの愛に逆主管されて

十六、「**霊的生を諦めて肉的生を選択したことが墮落**」と主張する誤り

駒場集団は、真のお父様が説明された「墮落論」の内容をかつてに変更し、霊的生を諦めて肉的生を選択したことが墮落であると主張します。彼らの資料には、次のように記されています。

「**霊的生をあきらめて肉的生を選択したのが墮落なので、復帰は墮落の反対経路として霊的生のために肉的生をあきらめる覚悟が必要だ**というのです。神様の愛のためなら、サタンから受けたすべての価値観と物質的所有と、肉的人間関係を全て捨てることができる、覚悟と選択が必要だというのです。その方法が正に所有権転換という蕩滅方法なのです」(駒場資料一四七ページ)

駒場集団は、「**霊的生をあきらめて肉的生を選択したのが墮落**」であると主張しますが、これは、真のお父様が説明された墮落論と異なつた説明です。『原理講論』では、次のように論じられています。

墮落が起こつたというのが真相なのです。

さらに、アダムも物欲レベルの問題ではありません。古今東西を問わず、男女は互いに引かれ合つと、むしろその愛を得るために、自分の財産、地位、名誉、さらに命さえも捨てようとしてきました。

男女の愛におぼれば、「**肉的生を選択**」するどころか、むしろ全財産を捨てて、あつても得たいと願つて、無理心中をする者もいたのです。

図1
「墮落」とは
ルーシエルとエバの不倫なる愛の問題から始まる
愛さえ得られるならば
ほかには「何も要らない」「死んでもいい」
肉的生さえも捨ててしまうのが墮落
「駒場集団」の言説
「**霊的生をあきらめて肉的生を選択した**」
→ 架空の理論であり誤りである

「ルーシエルは天使世界の愛の基となり、神の愛を独占するかのよう位置にいたのであつた。しかし、神がその子女として人間を創造されたのちは…神が自分よりもアダムとエバをより一層愛されるのを見たとき、愛に対する一種の減少感を感じるようになった…ルーシエルは、自分が天使世界において占めていた愛の位置と同一の位置を、人間世界に対してもそのまま保ちたいというところから、エバを誘惑するようになった」(二〇八〜二〇九ページ)

天使長ルーシエルは、天使世界において神の愛を独占する「愛の基」でした。しかし、神の息子として創造されたアダムとエバが、自分よりも多く愛されている姿を見て、愛の減少感を感じ、「自分が天使世界において占めていた愛の位置と同一の位置を、人間世界に対してもそのまま保ちたい」という過大な欲望を抱いてエバを誘惑するようになったのです。つまりルーシエルは、天使世界だけでなく、人間世界においても「愛の基」でありたいと願う過大な欲望に

実際、墮落論に「死ぬということを明確に知つていながら、しかも、それを乗り越えることのできる行動とは、いったい何であつたのだろうか。それは、愛以外の何ものでもない」(『原理講論』一〇二ページ)と記されているように、墮落とは不倫の愛から始まつた問題です。その愛さえ得られないなら、死んでもいいと思ひ、肉的生さえ捨てさせるのが愛です。それを「**霊的生をあきらめて肉的生を選択した**」と主張する駒場集団の言説は、架空の理論にすぎません。【図一】

駒場集団は、墮落が偽りの愛に基づく「不倫の性関係」にあつたことを隠し、財産に執着する物欲にこそ原因があつたと人々に信じ込ませ、全財産を捨てさせるために偽りの言説を作り上げているのです。

十七、「**神様と真の父母様の言えない秘密とは『死んでくれ』という言葉だつた**」と主張する誤り

駒場集団は、神様と真の父母様には言えない心の秘密があると述べ、それは「**死**

「でくれ」という言葉だったと主張します。彼らの資料には、次のように書かれています。

「死を覚悟してサタンの愛を選択した人間が生まれ変わるためには、死を覚悟して神様を選択しなければならぬ」というのです。神様と真のご父母様の言えない秘密というのはすなわち『死んでくれ』という言葉だったのです。親の立場では死んでくれと言えないのです」(駒場資料一四七ページ)

駒場集団は、上述のように語りますが、本当に「死んでくれ」と言えなかったのでしょうか。

イエス様は、「死なんとする者は生き、生きんとする者は死ぬ」(参照、マタイ一〇・39)、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう」(ヨハネ一一・24〜25)と語っておられます。

また、真のお父様も「皆さんが天のみ前

に立つとき、足りない自分自身を発見しなければならず、罪人であることを認識しなければなりません。……『死なんとする者は生きん』という言葉が、そこから成立します」(天一国経典『天聖經』八三四ページ)、「天国に行こうとする人は悲惨な生き方をしなさい、悲惨に死になさい、悲惨に歩みなさいというのです。……人のために命を捨てなさいと言つのです」(『地上生活と霊界』二〇九ページ)と語っておられます。

駒場集団が言う「親の立場では死んでくれと言えない」というのは、うそです。なぜ、駒場集団は、「親は『死んでくれ』とは言えない」などと虚偽を語るのでしょうか。それは、「霊的生をあきらめて肉的生を選択したのが墮落」という言葉と、「親の立場では死んでくれと言えない」という言葉を抱き合わせて語ることで、より効果的に金銭を出させることができるからに他なりません。

彼らの言説は、明日、食べるご飯を心配してはいけない、「死んでくれと言えない」親の心情を思つて死ななければならぬと訴え、金銭を出させるために作ったものに

すぎません。

十八、「血統」の概念を誤つて捉えている

駒場集団は、「子女の心情が父に似るようになる時初めて、血統が連結される」(駒場資料、一一〇ページ)、「メシヤの性的愛と連結させることで重生することができる」(同、一四九ページ)と述べ、心情関係や、心の変革によって血統が連結したり、重生がなされたりするという非科学的珍論を述べます。真のお父様は、血統について次のように述べておられます。

「皆さんが父母から受け継いだ命は、父の精子と母の卵子を受け継いだところから出発したのです。その卵子と精子が一つになったところに、愛によって根が生まれて発生したのが、皆さんの子女です」(『ファミリー』二〇〇七年三月号、七ページ)

真のお父様は、父母から子女への生命の

連結、すなわち「血統」に対して、それは愛を中心として精子と卵子が一つとなることから出発したと、生物学的に述べておられます。

ただし、精子と卵子の生物学的次元の指摘だけでなく、さらに深く考察され、「愛によって根が生まれて発生した」と愛を強調しておられます。神様の血統に連結するか、サタンの血統に連結するかという問題は、この「愛」を認識しなければなりません。駒場集団は、「子女の心情が父に似るようになる時初めて、血統が連結される」と、生物学的なものを無視して、非科学的に血統を論じますが、真のお父様は、血統と遺伝法則について次のように述べておられます。

「千代万代後孫が罪人になる善悪の果とは何でしょうか。これは血統的關係です。血統的に罪の根を植えておけば、遺伝の法則によって永遠に続くのです。そうであり得るのは愛の問題だけです。誤つた愛が墮落の原因です」(『祝福家庭と理想天国』(一)『四三三〜五ページ』)

図2

「駒場集団」

男女による両性の「生命」を抜きにして血統を説こうとする神様との心情一体化だけを説き、それによって神様の血統に連結できるとする見解は誤り

このように、「血統」と生物学的な「遺伝法則」は一体不可分です。『平和神經』にも、「生命と愛が合わさって創造されるものが血統です」(二八ページ)、「血統は、父母が子女だけに与え得る特権中の特権です」(三九ページ)とあり、血統とは、心情関係や愛の關係だけで連結するという非科学的なものではありません。

駒場集団は、男女による両性の「生命」を抜きにして血統を説いています。このような個人的次元における神様との心情一体化だけを説き、それによって神様の血統

に連結できるとする主観的觀念論の見解は誤りです。【図2】

墮落人間は、真の父母様による「祝福結婚」、すなわち聖酒式による血統転換を抜きにして重生されることはありません。祝福によってこそ、血統転換がなされるにもかかわらず、駒場集団は祝福結婚による救いを説こうとします。

駒場集団は、彼ら独自の「三日式」なるものによって、墮落人間の霊肉を死なせるのだと主張します。つまり、「三日式」によって、墮落人間の価値観を捨てさせ、人間関係を清算させて、肉的に生きていけないうようにすることで「重生」できるのだとします。そうやって執着心を捨てさせることで、過去の全てを清算した気持ちになせ、「自分は原罪を清算した」と思い込ませていますが、それは錯覚にすぎません。

そこには、血統の主人である天地人真の父母様による「重生」という観点欠落しています。駒場集団の誤つた言説に惑わされないよう注意しなければなりません。